



Osaka Gakuin University Repository

Title	彼の皮膚は水面と震えて アルフィアン・サアット短編作品試論 His Skin Trembling like the Surface of a Pond: A Study of Alfian Sa'at's Short Stories
Author(s)	長岡 みゆき (Miyuki Nagaoka)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 66 号 : 1-19
Issue Date	2013.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

彼の皮膚は水面と震えて アルフィアン・サアット短編作品試論

長 岡 みゆき

はじめに

アルフィアン・サアット (Alfian Sa'at) は、英語を表現手段として最も目覚ましい活躍をしているマレー人シンガポール作家である。詩、劇、短編小説の各ジャンルの作品を多数発表しており、賞を数々受賞している。それらの作品に一貫する主題はシンガポールの「大いなる成功物語」に代わる物語・ヴィジョンの模索である。この主題が詩と劇とにおいては現状告発として直接的に提示されている結果、作品はメッセージ性の強い挑発的なものとなっている。そのため、アルフィアンは駆け出しの頃「恐るべき子供」と評されたこともある。12の短編を含む『廊下』(Corridor) の表題—それは一つの短編の表題でもある—の「廊下」は、国民の80%以上が住み、シンガポールのハートランドといえる高層公営住宅の共用廊下を指す。¹そのことが暗示するように、これらの短編においては、アルフィアンは声高に現状批判を行うのではなく、普通の小さな人々をその心の襞に分け入り共感をもって描くことによって、もうひとつのヴィジョンを提示している。とりわけ筆者の興味を惹くのは随所に見られる皮膚感覚—触覚、圧覚、温覚、冷覚、痛覚を含む—的描写だ。一般にシンガポールのフィクションにおいては、政治や歴史の問題を議論するといった問題小説風で社会学的興味に訴えるものが目立ち、その目的は、背景描写、人物造型、問題分析—物質主義か精神主義か、保守か進歩か、民族主義か多文化主義か、などと問題を二項対立に単純化—を最小限に効率よく行なうことによって達成される。すなわち語り急がれるわけで、テキストの快樂、フィ

クシヨンの醍醐味をあまり期待できない (Morse 90)。乱暴な言い方をするなら、一度読めば十分ということである。ところが、アルフィアンの短編では、その皮膚感覚的描写においてまさしくテキストの快楽を味わうことができる。そういう描写が決して局所的な装飾ではなく、著者の主題と深い関わりがあることを論証するのが、本稿の目的である。

1

皮膚感覚的描写の突出した例は「枕」(“Pillow”)に見られる。18歳の青年が50歳の男性に中国茶店で別れを切り出すが、車で家まで送ってもらう途中に男性の家に立ち寄り、これが最後と彼のなすがままにさせる中で、これまでのことや中等学校時代の相手たちのことを思い出すという粗筋で、著者の実人生に基づいているかと思われる。この中に木の幹を這うアリのイメージが三度現れる。順番に引用する。なお、以下、引用は拙訳を用い、必要に応じて原文を添えることにする。

- (1) 彼はヘッドライトを点け、僕たちの前にある木を照らした。それからライトを強くしたので、わびしい樹皮をせわし気に這い回るアリたちが見えそうだった。(35)
- (2) 少なくとも彼は嘔吐きではない、と僕は思って、彼が僕の腕の中で溶けてやさしく顔を押し付け、影をつかもうとする人みたいに僕の胴体のあちらこちらに指を動かすままにさせた。僕は駐車場のあの木のこと、アリのことを考え続けていた。アリが樹皮を噛みちぎっている時、木にはわかっていたのだろうか。植物は痛みを感じるのだろうか。僕は彼の涙が僕の肩に落ちるままに、彼の唇が僕の肌に濡れた楕円形のあとをつけるままにさせた。目を閉じて、僕は彼の口がイソギンチャクの括約筋みたいに開いたり閉じたりしているのを

想像した。(36)

- (3) 窓辺に寄って、僕は下の駐車場を眺め、僕の人生の転機となったあの日に見た木はどれか確かめようとした。ねむの木が並んでいた。その幹でアリたちが滴る赤い樹液のように蠢いていて。(39)

このアリのイメージに注目した批評はあるが、青年の中年男性との「性的関係についての気持ちの混乱を表す」(Tay 203) と述べているだけである。しかし筆者はそれ以上のものがこのイメージにあると考える。まず(1)は夜の駐車場の車の中で初めて父親の友人であるその男性に身を任せた時の回想場面である。(2)はそれから男性の家へ行って関係を持った時のことである。ここでは、アリが青年の胴体という幹の表面を蠢き這い回る男性の「顔」と「指」とに重ね合わされていることが明確になる。視覚的現象から皮膚感覚的イメージを作り出している。更に、最後の一夜の場面では、アリこそ出て来ないが、「彼は凭れかかってきて、僕が仰向けになると、まず僕の首に、次に僕の両耳に、僕の髪に、涙を滴らせ、それが届かないところは唇が体中触れ回った」(40)とあり、男性の「唇」がアリを想起させるようになっている。これらの極めて皮膚感覚的描写—もう一例を付け加えるなら、(2)のイソギンチャクの括約筋のイメージも同性愛的に皮膚感覚的だ—は、上の批評にあるように、確かに「気持ちの混乱」を表してはいよう。しかし、アリが幹を這うイメージが読者にまず喚起するのは主人公の即物的不快感と苦痛だろう。

これら皮膚感覚的描写について注意すべき点を確認しておきたい。第一に、それは読者に不快感と苦痛を覚えさせることにより、主人公と共に苦しむことを可能にするという利点を持っていることである。第二に、それが主人公の自己についての重大な発見と結びついていることで、この青年の場合、発見とは、引用(3)にあるように、「人生の転機」となった出来事、即ち、年上の男性と援助交際関係を始めること、そして彼に嫌悪を感じる自分に気づきそれ

を絶つこと、である。そして第三に、それが主人公の想像力の証となっていることである。(1)に「わびしい樹皮をせわし気に這い回るアリたちが見えそうだった (“could almost see”）」とあるように、青年はアリを実際には見ていないし、その後の(2)と(3)においてアリが這い回るのは青年の想念の中でのことである。(3)では“Ants trickling”と非定形動詞で表されており、アリたちは時空の中に特定できないことが、主人公の想像の中のことであることを示している。皮膚感覚的描写に関するこの注意すべき三点は、他の作品にも認められ、とりわけ、「枕」と同じぐらいに皮膚感覚的描写が決定的意義を持っているものがあるのだが、それについての議論は最後に譲り、その前に、それ以外の作品でそうした描写が単なるお飾り以上の意義を示しているものについて見ておきたい。

2

まず、離婚してゲイとしてカミングアウトすることを決心した35歳の男性を主人公とする「ディスコ」(“Disco”)を取り上げよう。離婚前、彼はゲイであることを「腫瘍」(139)と捉えていた。そして、離婚を告げられ隣室で泣く妻がティッシュを「怒りに駆られて一度に2、3枚つかんで」箱から引き出す音を聞きながら、妻のその動作を、「べとべとした黄色い傷からガーゼを剥がすみたい」(140)なものと、ここでは聴覚的現象から皮膚感覚的イメージを作り出している。次に、意を決して主人公はディスコへ行くが、店へ続く階段の入り口で、「開けたオーヴンから出る熱気のように、音楽が彼の顔めがけて炸裂するのを感じ」(142)、「ズンズンという低音のリズムが腹に堪え」(142)ると、再び聴覚的現象が皮膚感覚的に描写されていて生々しい。同じ様なディスコの描写が最も有名なシンガポールの華人作家キャサリン・リムの短編「ケネス・ジェローム・ロザリオ」に見られるが、そこでは、「音楽は騒々しく、ダンス・フロアは一杯、雰囲気は申し分なく陽気で、ケネスは心が高揚してなんともいえないほど楽しかった」(90)とある。出来合いの語句での描写以前の描

写だが、そういうのがシンガポールのフィクションにおける描写の標準だ。

ディスコで、主人公は、当然のことながら、男性の肉体への関心・妄想を示し、そこには、これも当然のことに、皮膚感覺的描写が沢山見られる。例を挙げるなら、「大きな胸が化石化した枕のように見える人たち」(140)、「どんな柔らかさあるいは硬さなのだろうと想像した」(140)、「胸が柔らかか肉のように揺れている」(141)。そして、極めつけは：

金を出せば、その晩ただで胸に触らせてくれて好奇心でうずうずする自分の指にどう反応するか試させてくれる人がいるだろうか考えた。彼は市場で魚を押してみるようなやり方ではなくて、頭痛を和らげるためにこめかみを撫でる時のようにやさしく触るだろう。(141)

もう一つ「魚」のイメージを挙げるなら、踊る人たちを所在無げに見ている四人の若者たちの目を、「ミラーボールか遠い惑星のようで、そこから送られてくる細い光線は妖しく光る魚のように人々の顔や体の上を滑っていた」(143)という箇所がある。西洋文明において、一般に魚は生命、豊饒の象徴で、性欲と関係しており、その形状の男根との類似から、男性のセックスを表すとされている（ド・フリース 245）。生物学的条件は同じであるから、このシンボリズムは非西欧文明にも当てはまる。²

加えて、主人公がクラブの雰囲気になじめず両手をポケットに突っ込んだまま突っ立っている自分を対象化して、「野外研修帰りの子供が見つめてきたスズメの卵を温めているみたいに両手をポケットに突っ込んで」(147)と描写しているが、これには上で引用した「こめかみを撫でる時のようにやさしく触る」に共通する慈しみの気持ちが窺われる皮膚感覺的描写である。

これらの皮膚感覺的描写は、主人公の男性の肉体に対する欲望を表し、読者がそれを感じ共に苦しまぬまでも想像はする助けになっている。また、それらは、自分はゲイでありゲイとして生きようという主人公の自己に関する重要な

発見と分ち難く結びついている。更に、これらの表現には主人公の想像力の自在さが示されている。このように、この短編においても、皮膚感覚的描写には、読者の共感への手立て、主人公の自己発見、想像力の証の三つの意義を認めることができる。

次に、二人の子を持つマレー人女性を主人公とした「誕生日」(“Birthday”)を見てみよう。ロスミナは工場の深夜シフトで知り合ったインド人のカーラに誕生日の贈り物を買おうと必死の思いで50ドルを貯めたが、ある夜その虎の子を夫は掠め取りポケットに入れたまま寝てしまう。物語はその夜の彼女の心の中と外との出来事を描いている。

やり場のない不満の中で、ロスミナはカーラとシンガポール川沿いに散歩した時のことを思い出す。橋の手擦りに凭れた彼女の目に入ったものは「そのぬめぬめした筋肉 (“slimy muscles”) で一艘の荷役舟をこちらへ引きずってくる川」(133)で、その中に彼女は「年老いた華人の男が煙草を吸っているのを捉え」(133)だが、「男は彼女の方は見上げなかった」(133)とある。この後に、カーラは実はインドに妻子のある男に騙されて妊娠させられ捨てられたのだった、という打ち明け話が続く。その話に対して、「男の人ってそうよ」(134)とロスミナは二度短く応える。言うべき言葉のないままにあたりを見回す彼女の目は、水面に釣り糸を垂らしている三人の「上半身裸の男」を捉える。彼らは「汗をかいていて」(135)、「体が光っている」(135)ことを彼女は見逃さない。ここでも視覚的現象が皮膚感覚的描写に絡めとられていく。友人の悲しい告白を挟む部分における、男性についての彼女の欲望と嫌悪とを垣間見させるこの皮膚感覚的描写は、注目に値する。カーラの描写とその話し方にはそうした要素は一切なく、筋を進めるための最低限度の事柄が記述されているだけだ。

上述の回想の後で、ロスミナは子供たちの部屋に行って蚊取り線香を点けてやろうとする。4巻のうち3巻が折れていて、彼女は「その線香をもっと細かく砕き始めるが、プラスチックのカサカサという音が子供たちを起こしかねないことに気がつく。決然として彼女は止め、思う。自分はおかしい」

(136)。この描写には、鬼気迫るものがあると共に、線香の少し湿気た感触、プラスチックの乾いた感触が認められる。彼女は眠れない。

萎えが樹液のように脚や大腿や腹を這い上がってくるのを感じる。彼女は身を縮め、昔母親が言ったことは本当だろうか、体が凍りついて麻痺したように感じたら、それは悪霊が体の上に座っているのだというのは本当だろうかと思う。(137)

彼女は眠っている夫のポケットから正当に彼女のものである50ドルを抜き取ろうとする。が、夫への服従は伝統的な教えなのだから、そうすることは悪であり、それは実行できず、「まるで脇に開いた穴から漏れ出てしまったように」(137)、萎えが消えてしまったことに彼女は気がつく。

これらの皮膚感覚—触覚、冷覚、圧覚—的描写を通して、読者は主人公の皮膚感覚的体験をなぞり、彼女そしてその友人女性の、男性中心社会にあって一番身近にいる男性への欲望と嫌悪、裏切られることへの怒りを通り越したやるせなさを、感じとることができよう。また、そうした描写はここでも主人公の自分についての重要な発見と結びついている。それはここでは、ロスミナが折れた蚊取り線香をじっと見て自分に言い聞かせる「この世に幸せはない。あったとしても、わたしのものじゃない」(136)という言葉が端的に表している。女であるわたしのものじゃない、ということだ。さらに、第三点の、主人公の想像力について述べれば、この物語の殆ど全体がある夜の数時間の間の主人公の回想からなっており、加えてその中で友人に何かを贈ったら彼女はこんな風に驚くだろう、あんな風に喜ぶだろうと想像したことなどを回想する、つまり回想の中の想像／回想という入れ子構造になっており、この主人公も想像力に富んでおり、またそれが彼女の友人への共感を可能にしているといえよう。

第4編目として、この短編集の表題作である「廊下」(“Corridor”)を取り上げたい。これもまた、女性の回想、空想、妄想を中心に物語ができあがってい

る。この年輩の主人公は、ショッピングや「油でべとべとしたビニール袋に入った鶏の手羽先」(42)などを食べることやカラオケで歌うことが好きで、下位中間層として物質的繁栄を謳歌する家族の中で孤立感を覚え、また共用廊下で物理的に繋がっているとはいえ隣人たちとも疎遠になっている。彼女を含めて一家がジャカルタへ観光旅行に行っている間に、家の前の共用廊下の隅で借金がらみで男が殺されるが、彼女の家族も隣人たちも無関心である。しかし、主人公だけはその場所を歩いてみて、自分がその場に居合わせたかのように想像を逞しくし、哀れな男に思いを寄せる。その重要な箇所が終わり近くにあり、これもまた皮膚感覚的描写と共にある。

外に出たのは日の暮れで、裸足で廊下をぶらぶら歩いていると、死んだ男の記憶が頭について離れなかった。セメントの床が冷たかった。よく磨かれた冷たさ。……足の裏がべとつく感じがした。村のことを思い出したのはその時だった。ある晩のこと、金を盗んだ泥棒が森の中に身を隠した。村中総出でそいつを探しに行った。わたしみたいに小さい女の子たちも行って、半時間探したが駄目だった。わたしは眠たくなってきて、目をこすってばかりいたが、その時突然それを感じたのだ。わたしはそいつがあたりにいるという強い感じがした。そして近くの物影がかさこそと音を立て始めた。ビロードの布の下の蛇みたいに、何かが茂みの中を移動しているようだった。その時、わたしはそいつが一本の木の上にいるのを見つけた。ぶるぶる震えてて、年端もゆかぬ泥棒だった。わたしはやつがそこにいると指差した。その後うちへ帰る道すがら、わたしは目が鋭いとみんなが言ったが、わたしには感じる力が、こういうことを感じとる力があることが、わたしはわかっていた。

それで、目を閉じて、あの男の人、あの不幸な男の人のことを想った。うちの廊下に駆け込んで、殺されて、七つも刺し傷を負って、親族も見つからず、今わの言葉も書き留められず、目の前には夜明けの眺めを遮る廊

下の手摺りがあるばかりで、見る間に星も消えていって。(52-53)

裸足の足裏の感じる冷たさとべとつき、ピロードの重みある柔らかさ、くねる蛇のぬらぬらした光沢は、誰にもわかる皮膚感覚的なもので、ここではそれが、見知らぬ男への共感、そして記憶への、さらには不可視のものを感じ取る第六感への、きっかけとなっていることがわかる。そこでの男の死が彼女たちに「どんな裁きをもたらすのか」(53)とも考えるが、結局、彼女はやがて我に返って、男がどこで死のうとどうでもいいことで、彼女はそこにいなかったと、現実と和解する。しかしその時、それまで折り合い悪しく長い間開かずのままだった隣家の窓が開かれ、居間に電灯が点って、彼女の共感が空しい結果に終わらぬであろうことが暗示される。「廊下」においてもまた、主人公の皮膚感覚は自身の感応力、想像力を発動し自己発見を促すと共に、他者への共感を呼び起こし、かつ、その皮膚感覚的描写は読者が主人公の体験をなぞりその共感に参与することを可能にしている。

最後に、皮膚感覚的描写と主題との関わりにおいて決定的重要性をもつと筆者が考える一編を扱うことにするが、ここで触れなかった他の作品において皮膚感覚的描写が全く見られないわけではないことをことわっておきたい。問題の一編とは巻頭の「課題」(“Project”)で、これについては、主題との関連で後で詳しく論じる予定であるが、差し当たって今はその中の注目すべき皮膚感覚的描写の部分を見ておこう。粗筋は、ジュニア・カレッジ(大学予科)の男子学生サリムが、ある飲食店の手洗いで知的障害があるらしい華人少年と居合わせ、一人で小便するのが怖いから終わるまで待っていてほしいというのを振り切って去ろうとした時に少年は我慢できずに漏らしてしまい、学生は後でそのことに対して罪悪感を抱く、というものである。次に引用する皮膚感覚的描写は特筆に値する。

少年は一瞬ぶるっと身を震わせ、その短パンの前の部分に黒い染みが広が

り左の太ももに垂れてゆくのが見えた。それを見て衝撃を受けたサリムに、あの感覚が、海の潮の流れが自分のまわりに寄せる中でひとり立っていた時両脚を包んだ小便の温かさが、蘇えった。(4)

ここでも、視覚的現象が皮膚感覚的描写に転写されている。そしてその感覚がある記憶を蘇えらせる。

彼が水の中で手足をばたばたさせているのを華人の男の人が見て、岸へ連れ戻してくれた。海水を吐き出して大きく息を吐くまで、胸を押し続けてくれた。サリムはその男の人の顔を覚えていた。眉間に皺を寄せていた。祈っている人たちがよくするようにだ。金鎖を身につけていたことを思い出した。息を吹き返した時、サリムの目は大きく見開いていて、カジュアリーナの木の頂と、男の人の頭で欠けた太陽の端っこと、目の眩むような青い空とを眺めていた。(6)

帰宅しても罪悪感に苛まれるサリムは、飲食店で同席していた華人ガールフレンドに電話で苦しい胸の内を聞いてもらおうとするが、彼女は不在であり、彼は必死の思いで受話器に向って呟く。「あれは僕だったんだ (“It was me”)」(6)。

この物語においても、主人公はまさしく自己発見をする。あの華人少年と自分を重ね合わせ、共に苦しむ。二者を結びつける一点は助けられるべき者ということだ。その共感の契機となるのは皮膚感覚的体験だ。そしてそれはここでも主人公の記憶と想像力を発動させる。主人公は皮膚感覚的体験と記憶と想像力を通して他者たる少年と共感し、そしてその主人公の体験の描写を通して読者も主人公および少年と共感することになるのだ。

3

以上のように、アルフィアンの短編においては、皮膚感覚的描写が顕著であり、そのことは、主体としての登場人物が自分について重大な発見をし他者と共感するために、皮膚感覚的体験が鍵となっていることを示唆しているといえる。ここで一般的な意味での皮膚感覚（触覚を含む）について見ておきたい。西欧において、五感が共働しての世界に対する感応が、12世紀頃になると視覚が優位に立つようになり、その後、ルネサンス期に遠近法と印刷技術の発明によりその優位は揺るがぬものとなる。その結果、

世界は視覚支配に服す均質化された統一的・連続的世界となり、主体たる人間と完全に分離され、人間の世界との一体感が失われてゆく。啓蒙時代になると視覚—明るい明晰な知性に満ちた感覚—がますます重視され、政治的言説においてもその優位が強調される。(池上 254)

そして嗅覚、聴覚、触覚は後退することになる。18世紀末に考案された一望監視施設（パノプティコン）が「見ること、知ることが他の人間を支配する権力」（中村 54）であることからわかるように、視覚の専制は「人間と自然、人間と人間との間に見るものと見られるものとの冷やかな分裂、対立をもたらした」（中村 54）。遠くのを瞬時に全体的に捉えることを可能にした情報量大の視覚なればこそである。

そういう視覚優位のこの近代社会にあって、しかし、中村雄二郎は触覚の復権を主張する。ただし、彼は触覚を、圧覚、温覚、冷覚、痛覚と共に皮膚感覚として大きく捉え、さらにそれらが密接に結びついて働く筋肉感覚と運動感覚を加えて、体性感覚（“coenesthesia”）と捉え直している（中村 63-122）。まさにこの「体性感覚を基体とする諸感覚（特殊感覚 [視覚・聴覚・嗅覚・味覚・平衡感覚]）の統合によって、私たちの一人一人は他の人間や自然と共感し、一体化することができるのである」（中村 110）。視覚と違って皮膚感覚

は主体と対象・他者との近接性を前提としており、更に人間の深部と結びついているから、情報量は少ないがその密度は濃いといえよう。アルフィアの提示する皮膚感覚的現象が筋肉感覚・運動感覚に連動していることは明らかであるから、それを体性感覚と呼んで差し支えないが、皮膚感覚という表現を続けて用いることにする。その皮膚感覚的描写が局所的魅力、一過性の私的体験の記述に留まらず、シンガポール社会に対するアルフィアのヴィジョンないし問題意識に深く関わっていることを、格好の素材である「課題」を改めて検討することによって次に示したい。

4

本論で扱う他の短編においても、また扱わぬものにおいても、主人公はどれも、経済的敗者、知的障害者、時代の進歩における敗者、HIV患者、レスビアの失恋者、落第生、ゲイといった、シンガポール社会における周縁人間たちである。アルフィアは皮膚感覚的描写を用いることによって、読者がそういう主人公ないし登場人物たちと共感・共振することを可能にしていることは既に述べた。それに対して「課題」の特異性は、中心人間の主体としての視点から語られていることである。主人公のサリムが、その名前から明らかのように、マレー人であることについては後で問題にするとして、主な登場人物——一緒に学校の課題をやっている男女学生4人と華人少年——の配置を考えてみる。4人の学生は、6年間の初等教育、4年間の中等教育を経た、2年間のジュニア・カレッジ（略してJC）の学生だと思われる。彼らは大学へ進むはずだ。JC生であること自体がエリートであることを意味し、またもしこの主人公に著者の実人生が投影されているとしたらそれはラッフルズJCで、名門中の名門、中心的JCといえる。苛烈な競争的教育環境にあつて彼らがJC生であるということは強い経済的背景を持っていることを意味しており、そのことは、場末ではなく街の中心地区にあるマクドナルドで、物慣れた様子で課題をしていることから推察される。すなわち、彼らは現在そして未来の中心人

間たちということだ。そしてその中の一人のマレー人の中心人間が華人周縁人間の少年と共感するという構図になっている。

だが、仮にこれが、華人の中心人間がマレー人の周縁人間と共感するという構図になっていたとすれば、それは人口の74%を占める華人国民が、人民行動党政府の指導のもと、効率、実用主義、経済発展至上主義を掲げて現在の驚異的な繁栄を築き上げたのだという官製の大きいなる成功物語をなぞり、プロパガンダに与することになっただろう。可哀想なマレー人を助けてあげましょう、というわけだ。なぜならシンガポールにおいてマレー人国民はいわば落ちこぼれ、周縁人間の立場にある—あるいは置かれている—からである。ここでマレー人国民の位置を確認しておきたい。

土着民族としての彼らの特別な地位と優遇とは憲法第152条が保証している。³にもかかわらず、リリー・ズバイダ・ラヒムの『シンガポールのジレンマ』によれば：

全人口の14%を占める土着民族であるマレー人のコミュニティを、社会経済面および教育面でこれまでずっと周縁的地位に置いたままにしてきた人民行動党政府のやり方は、機会均等、実力主義、多民族主義の理論とその実践との間の様々な矛盾の例の中でも最も歴然たるものの一つである。

(Rahim 2)

彼女の著書の序論から第4章までの記述からその「実践」の一部を紹介しよう。政府はマレー人国民の生活向上のために最低限度の方策しか取ってきておらず、それが効果薄と判断すると、「文化的欠損論」(“cultural deficit thesis”)を持ち出す。これは、ある民族集団の遅滞を彼らの文化(否定的価値観や不活発な態度)、さらには遺伝的要素のせいとする考え方である。植民地時代から、勤勉で金儲けが得意な華人とは対照的に、マレー人はのんびりとして規律ややる気に欠けるというような否定的ステレオタイプで捉えられてきて、そ

れは人民行動党政府にも踏襲されたのである。ここで数字的な例を示すと、2005年の統計で、15歳以上の大卒者比率は華人30%、インド人11%、マレー人5.4%、平均世帯月収は華人 S\$4,570、インド人 S\$4,120、マレー人 S\$3,050となっており、格差は明らかだ（田村 84）。ほぼ変わらず華人が人口の約74%を占めてきたが、政府はこの華人優位を決して崩したくなく、高学歴の華人女性には生めよ増やせよと激励し、華人移民を歓迎する。さらに、議会においてこれを確保するべく、一つの地域にマレー系住民が固まらぬよう公営住宅での居住割り当てを定めたり、選挙区の区割りを恣意的に突然変更したりなどしている。また、国民皆兵のシンガポールで、マレー系国民は建国後20年近く兵役から除外されていたし、現在でも、国家の安全保障のためと称して、彼らは高度な武器使用や戦略に関わるような軍隊の微妙な部署には配属されぬようになっている。何故なら、国と周囲のマレー世界との間で彼らの心が引き裂かれるかもしれないから、というのである。マレー人国民の制度上の周縁性が例証できたと思うが、最後に、日常生活面での周縁的扱いの例を挙げておきたい。それは他ならぬアルフィアン自身が詩の中と劇の中との二度にわたって言及しているエピソードであり、おそらく彼の軍隊での体験に基づくものと思われる（Alfian 1998, 31; 2010, 95）。ある小隊で、インド人や華人の兵士は上官に名前と呼ばれるが、マレー人兵士は「マレー人! (“Melayu!”)」と呼ばれる。ところがその小隊にはマレー人が二人いるので、そう呼ばれると二人とも駆けつけなければならないことになる。あからさまとも隠微ともいえる差別である。個人を主体として同定する最も基本的なものである名前を認められず、マレー人は上官—おそらく華人—にとっては客体、他者にすぎないのである。このエピソードは、シンガポールにおいて、マレー人は差別される者、見られ、知られる客体、他者であることを端的に示すものである。以上から、マレー人国民の周縁性の一端を垣間見ることができたであろう。

「課題」において、助けるのが中心人間である華人で助けられるのがマレー人少年という構図になっていたとしたら、既に述べたように、それは文化的欠

損論と大いなる成功の物語とを上書きするに過ぎないことになる。しかし、実際は、かつて中心人間である華人に助けられた民族的周縁人間であるマレー人の主人公が、今度は知的障害者として周縁人間である華人を助けるべき立場になっている。この逆転が暗示するのは、誰もがいつでも何らかの意味で、助けられるべき弱者、マイノリティ、周縁人間になりうるということだ。だからこそ、想像力をもって他者と共感すること、共に苦しむことが必要なのだ。例の出来事のあと少年の母親がひどく彼を叱ったことに対しての、主人公の華人ガールフレンドの反応は、「バッカよね、あの女 [少年の母親]。お漏らししただけじゃない。店に行って、新しいパンツを買えばすむことでしょ。……なんでもそこまでぶたなきゃいけないのよ」(4)で、様々なことを金で解決する傾向のある政府を思わせる、まことに実用主義的な反応であり、助けなかったことを思い悩む主人公と好対照になっている。

おわりに

筆者は最初、「課題」をナイーブな青年の物語として軽く読み過ごしていた。しかし実は、表題中の「課題」は、「学生の宿題」というよりは、シンガポールにそして私たちに課せられた、中心も周縁もなく誰もがより生き易い社会の実現を目指すという難題のことで、この作品が巻頭に置かれているいわれはおそらくそこにある。『廊下』に収録された作品を通して、アルフィアンは物質的、世俗的欲望の充足を第一とするシンガポールの大いなる成功の物語に代わる物語、いまひとつのヴィジョンを提示している。そのヴィジョンによれば、人間と人間の物理的接近性を土台とする皮膚感覚的体験とそれに裏打ちされた想像力こそ、経済的に搾取し合うのではない、共感的な人間関係の基盤となるかもしれないものなのだ。無論、そのことによって他者を救えるかどうかはわからない。ただ「眉間に皺を寄せて……祈」ることができるだけかもしれない。ともあれ、アルフィアンの皮膚感覚的描写が単に局所的なテキストの快樂ではなく、彼の抱える大きな主題と分かちがたいものであることを

示すことができたと思う。アルフィアンの詩集『記憶喪失の歴史』には「電撃的ガーザル」として12編が収録されている。ガーザルは6つか7つの二行連句からなるペルシャ起源の定型詩で、最後の二行連句に詩人が自身として顔を出すのが特徴であるという (Alfian 2001, 86)。その最後を飾るのは「思いやりのガーザル」(“Ghazal of Compassion” [この compassion は安易な「同情」という意味ではなく、「共に苦しむ」という語源的な意味に捉えたい]) で、その最初の2行でアルフィアンは「一本の指先には力が、鋭敏な力が宿っているのだ。／私の皮膚が池の面のように震える時に」(“I say a fingertip has power, a subtle power./When my skin trembles like the surface of a pond”) と書いている (Alfian 2001, 12)。「精神」とか「心」とか「魂」とかいわず「皮膚」と言うところが誠にアルフィアンらしく、ここに彼と彼の作品とを理解する鍵がある。

注

- 1 「ハートランド」は一般に「心臓部、中心部」の意味だが、1999年の建国記念日大会で、当時の首相ゴ・チョク・トンが「ハートランダー」という語を使い始め、「ハートランド」は大多数の下位中間層が住む高層公営団地を指すようになった。(Chong 5)
- 2 T. S. エリオットの初期作品「聖ナルキッススの死」(“The Death of Saint Narcissus”) の「それから彼は自分が魚だったと思い／そのぬらぬらする白い腹は自分の指でしっかり掴まれ／自分の手に握られてのたくり」という箇所を思い起こさせるが、それが自慰行為を表すということは定説になっている。(Eliot 97)
- 3 第152条は「島土着の人々であり大いに援助を必要としているマレー人の特別な地位を認めることは常にシンガポール政府の意図のおよび意識的な

政策であり、従って彼らの政治面、教育面、宗教面、経済面、社会面、および文化面での権益とマレー語との保護、支持、育成、促進は、シンガポール政府の責務である」としている。(Rahim 9)

引用・参考文献

- Alfian Sa'at. *A History of Amnesia*. Singapore: Ethos Books, 2001. Print.
- . *Corridor*. Singapore: Raffles, 1999. Print.
- . “Fugitives.” *Collected Plays One*. Singapore: Ethos Books, 2010. 83-154. Print.
- . *One Fierce Hour*. Singapore: Landmark Books, 1998. Print.
- . Review of Lily Zubaidah Rahim’s *The Singapore Dilemma: The Political and Educational Marginality of the Malay Community*. *sglibertas.wordpress*, 19 Nov. 2005. Web. 14 Dec. 2013.
- Birch, David. “Haresh Sharma and Alfian bin Sa’at: Writing an Alternative Ethic in Singapore.” *Gwee* 137-50.
- Chong, Terence. “‘At least my Singapore is real’: The Politics of Authenticity in Identity-Formations.” *Reviewing Singapore*. Ed. Koh Tai Ann. Spec. issue of *Moving World* 10.1(2010):3-19. Print.
- Eliot, T. S. *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts Including the Annotations by Ezra Pound*. Ed., with an Introduction, by Valerie Eliot. New York: Harcourt Brace Jovanovich 1971; London: Faber & Faber, 1971. Print.
- Gwee Li Sui, ed. *Sharing Borders: Studies in Contemporary Singapore-*

- Malaysian Literature II*. Singapore: National Library Board, 2009. Print.
- Holden, Philip. “Introduction to Section 3: 1990-Present.” *Writing Singapore: An (sic) Historical Anthology of Singapore Literature*. Eds. Angela Poon, et al. Singapore: Nat. U of Singapore P, 2009. 359-79. Print.
- Lim, Catherine. “Kenneth Jerome Rozario.” *Or Else, the Lightning God and Other Stories*. Singapore: Heinemann Educational Books (Asia), 1980. 62-81. Print.
- Morse, Ruth. “Novels of National Identity and Inter-National Interpretation.” Eds. Mohammad A. Quayam and Peter Wicks. *Singapore Literature in English: A Critical Reader*. Serdang, Malaysia: University Putra Malaysia P, 2002. 83-99. Print.
- Rahim, Lily Zubaidah. *The Singapore Dilemma: The Political and Educational Marginality of the Malay Community*. New York: Oxford UP, 1998. Print.
- Tan, Kenneth Paul. “The Narcissistic State and the Singapore Story as Its Mirror.” *Singapore Shifting Boundaries: Social Change in the Early 21st Century*. Eds. William S. W. Lim, et al. Singapore: Asian Press Lab, 2011. 73-83. Print.
- Tay, Eddie. “Singapore Fiction after 1965: A Critical Survey.” Gwee 197-215.
- 池上俊一『歴史としての身体—ヨーロッパ中世の深層を読む』柏書房 1992年
田村慶子編著『シンガポールを知るための62章』第2版 明石書房 2012年
ド・フリース、アト『イメージ・シンボル事典』山下修一郎他訳 大修館
1984年
中村雄二郎『共通感覚論—知の組みかえのために』岩波現代選書 岩波書店
1980年

His Skin Trembling like the Surface of a Pond: A Study of Alfian Sa'at's Short Stories

Miyuki Nagaoka

The essay studies several short stories in *Corridor* by Alfian Sa'at, Singapore's most prominent Malay writer in the English language. In general, Singapore fiction has the tendency to sculpt narratives unilaterally toward a desired end. This results in treating cardboard characters mechanically and often presenting theses in simplistic binary oppositions. One may read those novels and short stories for sociological interests but would rarely expect to find the pleasure of the text. However, Alfian's stories do provide the pleasure. Often it resides in his descriptions of cutaneous sensations—sensations that, in comparison with those of hearing and of sight, presuppose the subject-object proximity. Through description, he shows how the protagonist-subject empathizes with the other-object in the story, thereby enabling the reader-subject to empathize with the other-object as well.

Singapore society is dominated by a government-authorized vision of worldly success as the measure of human worth. Alfian's characters are invariably from groups marginalized in that society, such as gays, unrequited lesbian lovers, school dropouts, mentally handicapped persons, and economic losers. The purpose of the essay is to demonstrate that Alfian's usage of cutaneous sensations are no mere happy local embellishment, but an utterance of his alternative vision for his nation. It is a vision that may enable people to live, not in mutually exploitative relations but in relations grounded in understanding and empathizing, and it is the vision that he consistently projects also in his poems and plays.